

モブ・ノリオに関するプロレゴメナ

小倉 恵 実

0. はじめに——モブ・ノリオとの「出会い」

てればハ、脳ヲ狙ッテ戦ヲシカケルぷろノ兵器ダ。⁽¹⁾

日本から、そして日本の文学からしばらく離れていたせいも、「モブ・ノリオ」と聞いて「Mob Deep をもじって名前をとったのか？」程度の見当違いなことを考えている間に、彼は芥川賞受賞のインタビュー用に立ち並んだマイクに向かってダイブしてきた。タオルを首に巻き、サングラスをかけた彼はその後、「すみません、舞城王太郎です」と言ってマイクを直した。前年の芥川賞を受賞した二人の少女がアイドル扱いされていたこともあって、派手にダイブしておいて「すみません」と粛々とマイクの位置を直すという「今回の芥川賞受賞者」である彼の行動が余りに極端だったことを忘れることはできなかった。

その後、彼は「芥川賞作家」として知られることになるが、同時に彼のプロフィールには「現在、無職。」と書かれているものが多い。⁽²⁾ 芥川賞を受賞すれば「作家」とだけ肩書きに掲載すればよいのだが、モブはそれを頑なに拒否しているように見える。それは彼の中の「自分はダメ人間だ」という「強い規範意識」がそうさせるのかもしれない。⁽³⁾ ともあれ、彼との最初の出会いは彼言うところの「ぷろノ兵器」たるテレビを通してのものだった。

その次に彼に「出会った」のは、NHK のこれまた「ぷろノ兵器」たるテレビ番組だった。そこでも彼は「芥川賞作家」と紹介されつつも、出身地である奈良県桜井市の実家＝自宅でテレビカメラ（＝メディア）に背を向けつつドラムを叩いている姿で登場した。そして、受賞作となった『介護入門』の一節が居住まい正しい（であろう）国営放送のアナウンサーによって朗読された瞬間、自分の耳を疑った。

「YO, 朋輩, 俺は大麻を吹かしながら, 俺の墓穴を掘り続けよう。」⁴⁴⁾

恐らくアナウンサーはその一文を文字が指示する通りに朗読したに過ぎないかもしれない。しかし、「朋輩」と書いて「ほうばい」と読ませず「ニガー」と、日本の偽善的な道德の代表者たる NHK 所属のアナウンサーに読ませたことは衝撃的としか言いようがなかった。

『介護入門』は上に挙げた文章のように、「ヒップホップ調」と色づけされて紹介されることが多い。確かにアメリカのヒップホップでは黒人のラッパーが “Yo, Nigga” と半ば枕詞のようにライムを刻んでいることが多い。しかし、ヒップホップに詳しくはビースティ・ボーイズ (ユダヤ系アメリカ人のラップグループ) やエミネム (北歐系アメリカ人のラッパー) の中には一言も「ニガー (Nigga もしくは Nigger)」という言葉が出てくることはない。エミネムは自ら率いる D-12 (ダーティーダズン) の中で唯一の白人ラッパーであるが、他の黒人ラッパーのメンバーが何回「ニガー」と叫ぼうが、エミネム自身は決して「ニガー」とは言わない。⁴⁵⁾ その言葉は 1960 年代の公民権運動以降、差別用語として「白人が使えば即差別用語とされ、糾弾されなければならない言葉」と認知されているものだからだ。⁴⁶⁾ 90 年代以降にはヒップホップや R&B 専門の FM ラジオ放送の中でも巧妙にこの言葉が消されて流されている。

それが、日本では国営放送で何の注釈も無しに「ニガー」と堂々と朗読されている。この温度差の違いに戸惑いを覚えなかったのは私だけではあるまい。もしかしたら、モブ・ノリオはこの一種奇妙な現象を敢えて「てれび」という空間の中に作り出し、戸惑う人々を「見て」、密かにしてやったりとほくそえんでいるのかもしれない。

1. 「朋輩」は「ニガー」たりうるか？

血の濃さなんか介護には糞の役にも立たぬのだよ, 朋輩。⁴⁷⁾

芥川賞を受賞した時の選評として選考委員の一人であった山田詠美は『介護入門』に以下のようなコメントをつけている。

麻呂顔なのに、ラップもどきをやっちゃってるのが玉にキズの非常にまっとうな小説。(中略)でも、朋輩にニガーなんてルビ振るのはお止めなさい。田舎臭いから。⁸⁸

ここで山田詠美は「朋輩にニガーなんて」と一見批判しているように見える。しかし、逆にそのコメントによって『介護入門』という小説が「田舎臭い」土地を舞台にしていることを暗黙のうちに肯定してしまっているともとれないだろう。モブはその「田舎臭さ」にこそ生じる感情や怒りを『介護入門』の中で吐露している。そしてその自らの「田舎臭さ」を「土人」や「土人的生活」^{ネイティブ・ジャパニーズ・ライフ}といった表現で代弁している。そして、大手家電メーカーが開発した介護用ロボットに激しい違和感と怒りを向ける。

YO, 土人の血族たる俺の方が余程科学の進歩に繋がる感性を持ち合わせている, 過去系の近代性に囚われた技術の焼き直しに勤しむ技術者なんかよりもな, 朋輩。

まさにモブ・ノリオと「土人性」とは切っても切り離せない関係にあると言ってもよい。さらにモブはお笑いコンビの笑い飯との鼎談の中でこのように語っている。

時代劇のことを書く時に、「土農工商穢多非人時代が舞台の、農と穢多と非人が出てこない町人ドラマの再放送」と書いたんですよ。だってドラマに農民だとか、当時あった被差別階級の人たちって出てこないじゃないですか。それ、ものすごいイヤミを込めて書いたんですけど(中略)「その言葉があること自体ダメです」と。なんでやねん、と。だって僕の家の周りとか、そんなん普通なんですよ。⁸⁹

ここでモブは自らを斬ると同時に現在の地方の農村社会の閉鎖的な構造をも斬る手段として小説を、そしてラップ調のリズムを敢えて選び、またタブーとされる表現や記述を選んだ。なぜならば、「抵抗することの意味を考えるのがヒップホップだった」からであろう。⁹⁰

なにもこのことはモブ・ノリオのこの小説だけに限られたわけではなく、日本でコアなアンダーグラウンドを構成するラッパー全般の通奏低音としてある感情なのではあるまいか。現に先述した「抵抗することの意味を考えるのがヒップホップだった」と表現したのはECDであり、⁹⁰「自分の価値観に責任」を持つ手段としてヒップホップを選んだのはShing02である。特にShing02はサンフランシスコという「外の目」から日本の社会を眺めた時に立ち現れてくる部落問題や在日コリアン問題などの側面を包み隠さず暴いて「2005」という曲の中に取り入れた。「タブーと思うからそうなのであって、理由があるなら言いたいことは何でも言えば良いと思う。」⁹¹これはShing02の立場であるが、同時に偽善に囲まれた閉鎖的な農村社会に生きることを敢えて選んだモブ・ノリオの立場としても読み替えることができるのではないだろうか。

叔母以外の祖母の子らも、おしなべて家に来るときはわざわざ弁護士
のいる時間帯、お見舞い気分でおらしく花などを提げて勝手口を開く、
(中略) この子がやってるから私はええやろ、そんな冷めた空気まで漂
わす還暦を控えた大人達には、ベッドで祖母を抱き上げる際に母や俺が
腰に走る鈍痛の恐怖を押してそこに臨むことを想像もできないだろう、
死ぬまで。⁹²

それでもやはり、「朋輩」を「ニガー」と読み替えるには、あまりにその二つの言葉が置かれた社会的状況が違いすぎるのではないだろうか。彼はこのスタイルについては友人の話としてこう述べている。

僕に電話してくるといつも「ニガー」と第一声で言うむちゃくちゃ悪い
友達がおるんですよ。まあ、差別用語じゃないですか。そいつが言う
には、西洋では日本人ほど差別されてるものなんかないねんから、と。
「だって、オレらは東洋人やんか。それだけで差別される」って。⁹³

確かに西洋において東洋人差別は事実として存在するし、それに抵抗してきた人々の歴史も存在する。しかし、東洋人は「ニガー」ではない。彼らは実際に差別されているが「ニガー」とは違う差別のされ方をしてきたことは多くの

研究者によって明らかにされているところだ。しかし、モブは東洋人差別と黒人差別の違いという考えに至るまでにはいかなかった。

『日本人の黒人観』などの著書で日本人の中での黒人差別意識を問題として取り上げているジョン・G・ラッセルは「現在の日本人の『黒人性』への執着によって若者達は『日本人』としての狭められた社会的役割のなかで経験もしくは表現できない表現の自由を得ている」⁹⁹と論じているが、モブもやはり、日本人という、いや、もっと狭く「奈良の桜井人」という非常に狭い枠組みの中に追いやられた自己存在を解放する手段として、「ニガー」という言葉とラップのような次々とたたみかけるような文体を選んだのかもしれない。それでも、日本に住むアフリカン・アメリカンとしてラッセルは『介護入門』について、「彼（モブ・ノリオ）は何故他の方法で表現することができなかったのか、と思います」とコメントした。¹⁰⁰

大学で文学を専攻し、現在の論壇を代表する人々によって開かれる『熊野大学』に参加していたモブだが、彼は同時に音楽への憧れも持っていた。彼は1999年7月、ニューヨークに多種多様のバンドを見るための旅路につくが、その途半ばで祖母が倒れるという一報を受け取る。

帰国するかどうか、すごく迷いました。どこかに「ばあちゃんならもうええやろ」という気持ちもあるんです。でも、冷静になってみたら「いや、オレ何考えてんのか」と思い直した。どっちを選んだら後悔するかと思うと、そのままニューヨークにおいても絶対楽しめないに決まっている。また来たらええやん、と思ったんですね。¹⁰¹

ここでもし、モブが帰国せずにニューヨークに留まって、ライブだけでなく実際の「ニガー」達の生活や考え方、そして彼らが歩んできた歴史に直に触れる機会がもっとあったならば、モブは「朋輩」と「ニガー」の落差に気付いたかもしれない。しかしそれは同時にモブ・ノリオという作家が『介護入門』という作品を産み出す可能性をも消してしまったかもしれない。モブにとって家族、特に祖母は自分の創作の源となっているのだ。そしてモブはこう叫ばずにはいられない。

アタッ、アタッ、アタリマエなのだよ、朋輩！俺ほど家族に恵まれて育った人間なんてこの世に存在するのだろうか？⁸⁸

「恵まれた人間」として、モブ・ノリオは奈良という古式ゆかしい農村共同体が今なお存在している片田舎で「奈良以外の、遠いところへ」⁸⁹の憧れを抱きつづけたまま、「実ににこやかに」「毎晩人を殺す気ではあちゃんの下世話をする」⁹⁰。ニューヨークという「夢の世界」を去ることに決めたモブは「おばあちゃん」という最大にして最愛の「現実」と真正面に向き合うことで、夢（＝ニューヨーク）の中にも現実（＝ニューヨークの黒人たちの生活）が潜んでいることはおろか、「己のことを考える余裕」⁹¹すらない世界に身を置くことに自らを定めてしまったのである。

そして現在も奈良に住み続けているモブは、三作目となる『食肉の歴史』の中で、雑貨屋に<LA☆TIMES>として置かれていた英字新聞の束の前で立ち止まることによってようやく「朋輩」と「ニガー」の間の絶望的な距離を感じることができたのかもしれない。

<ラッピングペーパーとしてもイイし、部屋にかざるだけでもカッコイイッ！1つあれば、いろんなコトに使えますよ。DayLy¥399・Sunday ¥609>

右の如き（引用者注——この作品は縦書きに書かれているのでこのような表記になっている）日本語を書き込んだコメント・カードが2004年4月18日発行のLos Angeles Times日曜版に添えられていた。その表紙、第一面には、ボンネットと前輪以外は判別のつかぬほど大破した自動車の残骸写真と、すぐ隣の“Israel Kills New Leader of Hamas”という見出しがあった。パレスチナ人の活動家の自動車が、イスラエル空軍機に空からミサイルを打ち込まれる以上に悲惨な事態が、我が田舎町で起こっていて、安物のコップやらビーチサンダル、玩具、（中略）それらと同様に、粹で洒落た読解不能の記号を刷った紙として、英語の新聞は認識され、雑貨屋で売られていて、これが我が町の、2004年現在の或る若者らの現実なのであった。⁹²

2. モブ・ノリオはニートなのか？

何しろ俺ももう三〇だ、否、二九か、
運動選手なら寿命を終える年齢なんだからな、
俺と来たらまだ何者でもない、それどころか、
何者かになることが人生のすべてであるかのような思考を俺は拒絶する、⁸³

『介護入門』の中でモブ・ノリオが「朋輩^{ニガー}」と叫ぶ時、彼は相手が本当に「ニガー」かどうかは問題でないように思える。まるで黒人ラッパーが「できそこない」とか「ならずもの」とか世間から名指されている自らを嘲笑するような口調で、モブはこの言葉を発しつつづけている。実際、彼は自らのことを「ダメ人間」と呼び、自分の歩んできた人生を「私のふざけたプロフィール」と公言している。⁸⁴ 上述に挙げたようにモブ・ノリオは「俺と来たらまだ何者でもない」のだ。

先述したように彼は自らが「無職」であることを非常に肯定的に、時に反抗的に認めている。しかし、このようなモブの生き様（生活動態と言っても良い）を書いた『介護入門』の主人公を表現するに際し、単純に「ニート」と捉える人は多い。⁸⁵

既に流行語になってしまった感もある「ニート」という言葉だが、もともとは“Not in Education, Employment or Training”という言葉の頭文字を取ってつけられた言葉（NEET）であり、「働こうとしていないし、学校にも通っていない。仕事につくための専門的な訓練も受けていない」⁸⁶ 若者達を指す。

確かに『介護入門』の中での主人公（＝モブ）は「僅か週三日ばかり、小学生相手の家庭教師という三〇前の男にしては余りにもゆるいアルバイト、それにこんな俺を見かねてか、古い友人がたまに誘ってくれるバンドへの気まぐれな参加だけが貴重な社会的リハビリだ」⁸⁷ と自らを「外の社会」とは距離を置いて存在していることを述懐している。そして、「無職の自称<<個人的な音楽家>>の俺」に対して、最も卑近な「親戚」という「外の社会」からの冷やかな目が注がれる。

だがな、実に面白いことを親戚から言われたりもするのだよ、「アン

夕、毎日お昼頃まで寝てんのん？」ああ、日頃から俺を金髪の穀潰しとしてしか認識せぬそいつの無意識がそう言わしめるのだよ、ha, ha,²⁹

だが、「金髪の穀潰し」と表現した主人公（＝モブ）は「寝たきりの祖母の在宅介護」を積極的に引き受け、「深夜二回、理想的には二時頃一回と五時から六時半の間にもう一回、祖母の股を熱いタオル地で拭い更の襦袢に仕替え、物言いたげに目を開く祖母の隣で折り畳みベッドから夜明けを迎える」³⁰ という「時間外重労働」をやっている。

しかし、そんなことを知らない親戚から上のようなセリフを言われ、主人公（＝モブ）はただ、「ha, ha」と自嘲気味に笑うしかないのだ。勿論、『介護入門』の中にはプロフェッショナルの介護ヘルパーも登場するが、彼らは通り一遍の介護「業務」をこなして、そして「家」に帰っていく。そして主人公（＝モブ）は介護ヘルパーがいない間ずっと「老人の在宅介護」という、これ以上ない重労働に奉仕し、「死ぬ気で」介護の相手たる「おばあちゃん」と向き合って生きている。祖母の介護をするために「夜中から朝までに三回も起床」しなければならない主人公（＝モブ）の必死に労働する姿を、しかし、「外の世界」の人々は見ることなく彼を「社会から脱落した人間」と勝手にレッテルを貼って嘲笑的にする。

そこには「老人に対する在宅介護は労働のうちには入らない」という暗黙の「常識」が反映されているのだ。いくら主人公（＝モブ）が死ぬ気で祖母に対する介護をやっても、「家にずっといる男は働いていないのと同じ」という家父長制度的な態度をもって一瞬にして主人公（＝モブ）は「労働者」から「穀潰し」に転換されてしまうのだ。

何もこれはモブだけの体験ではあるまい。高齢化社会の現在、老人の在宅介護という道を選んだ家庭全てが請け負わなければならない「労働」であるにもかかわらず、「家でする仕事」は「仕事」の内には決して組み込まれることはない。故に主人公（＝モブ）は「家にずっといて仕事をしない人間＝ニート」という短絡的な図式が成立してしまうのだ。

また、主人公（＝モブ）に対してはそれよりも遠い「外の世界」の人々からはこうも言われる。

流し台でトマトの空き缶を濯ぐ俺にジャージ姿の中年女が今日も話しかけてきた。「自炊出来はるなんて将来の奥さんは幸せですねえ。結婚とかなさらないんですか？」⁶⁸

ここでまた、「家」についての家父長制的な「常識」が主人公(=モブ)に投げかけられる。即ち、「ジャージ姿の中年女」の言葉をひっくり返せば「男は自炊なんて出来なくていい。早く結婚して家庭を作るべきだ」という「常識」である。この「ジャージ姿の中年女」の言葉に対して、主人公(=モブ)は怒りを込めて書きなぐる。

またも、性的嫌がらせか！工作中に性器の話題、「僕ね、ほんま、物っ凄いホモなんですわ」と咬ましてやった方が良かったのか？⁶⁹

おそらく「ジャージ姿の中年女」は、祖母の介護を一手に引き受けて「家を守っている」主人公(=モブ)の姿に半ば感心し、半ば嘲笑して語りかけたに違いない。しかし、彼女はその言葉によって自分が保守的な家父長制度の中に生きていることを逆に曝け出してしまったのだ。それをモブは何の戸惑いも遠慮も無く「性器の話題」と言ってしまう。これはとりもなおさず「男は外で仕事をして金を稼ぎ、女は家で家事をして家を守る」という性別役割分業が未だ主人公(=モブ)の住む奈良という保守的な古都では成立していることを鋭く指摘している。また、それと同時にホモセクシュアリティに対する理解もここ(=奈良)では絶望的に無いであろう、というモブの諦めに満ちた態度が見え隠れする。実際、モブは「ええ塾、ええ高校、ええ大学へ行かせた子供が、近鉄、関電(関西電力)、南都銀行か県庁に入るのが奈良の保守的な親らの願いだ」⁷⁰と「保守的な親ら」の「常識」について指摘している。

それらの「常識」をモブは全て覆す存在であろうとしている。第二作である「ダウン大学」において、彼はそうした「常識」を喧伝するテレビの存在をおぞましいまでに毒々しく批判している。

ダガ、てれびノ幻影ハ、ソレヲ見ル人ヲ、一度ニ夥シイ数ノ人ノ脳ヲ、
現実ニ殺シテイルデハナイカ。(中略)こまーしゃるコソ、てれびノ本

質ナリ。前後ヲ繋グト見セカケ暴力的ニ切断スルこまーしゃる映像ニ、
悪質ナ無痛中毒症ノ究極ガ詰マッテオル。⁸³

そして、その最も忌み嫌うところのテレビにおいて自分が芥川賞を受賞したことが報道されるや、近隣の人々から向けられる目が全く変わってしまったことにも、モブは冷やかな態度を取っている。

半年前までは引きこもりでしかなかった私が、今は文学の賞を授かったことで、まるで立派なエライことを成し遂げたかのように、近所のおっさんおばはんじいさんばあさんから褒められてしまう——この現象は、冒頭に挙げた保守的な奈良の親らの心情から生まれるものだ。⁸⁴

報道関係者に対しても、モブは「商業的な流れにあわせる形でやってもしゃーない」⁸⁵と冷酷とも思えるまでに淡々と応えている。

ではモブ・ノリオは今後どうなるのだろうか。モブはお笑いコンビの爆笑問題との鼎談の中で「反抗の根底にあるものは、常識に取りこまれることに対する恐怖心だ」⁸⁶と答えている。

自分の周りの人間が（テレビその他によって）どのように自分を見る目が変わってしまっても、それに迎合することなく「常識」という大きな敵に向かって、どんなに小さい形にせよ、反抗すること——これは何もモブ・ノリオひとりの問題ではなく、様々な情報に溢れ過ぎた現在の社会を生き抜いていくために我々一人一人が持たねばならない恐怖心なのかもしれない。

参考文献・参考資料

- モブ・ノリオ『介護入門』（文芸春秋社 2004年）
陣野俊史『ヒップ・ホップ・ジャパン』（河出書房新社 2003年10月）
玄田有史・曲沼美恵『ニート——フリーターでもなく失業者でもなく』（幻冬舎 2004年7月）
後藤明夫編『Jラップ以前～ヒップホップ・カルチャーはこうして生まれた～』（TOKYO FM出版 1997年）
ジョン・G・ラッセル『日本人の黒人観——問題は「ちびくろサンボ」だけで

はない』(新評論 1991年)

ジョン・G・ラッセル『偏見と差別はどのようにつくられるか——黒人差別・反ユダヤ意識を中心に』(明石書店 1995年)

山崎行太郎「月刊・文芸時評——芥川賞受賞作『介護入門』をどう読むか」
(2004年9月1日)

『文芸春秋』九月特別号(文芸春秋社 2004年)

『STUDIO VOICE』vol.348～vol.352(インファス)

『Quick Japan』vol.56(太田出版 2004年9月)

『文学界』九月号(文芸春秋社 2004年9月)

『新潮』2004年11月号

『AERA』(朝日新聞社)2004年8月2日号

- (1) 『文学界』九月号(文芸春秋社 2004年)「ダウンナー大学」p.28
- (2) 例えば『文芸春秋』九月特別号(文芸春秋社刊 2004年)p.387など。
- (3) モブ・ノリオは『STUDIO VOICE』vol.353(インファス 2005年5月号)の市川真人と池田雄一との鼎談の中で池田の「モブくんのようなダメ人間」という形容に対し、「ダメ人間やから。規範なんてどうでもよかったら、もがいたりせえへん。」と応えている。
- (4) モブ・ノリオ『介護入門』(文芸春秋社 2004年)p.16
- (5) エミネムと「ニガー」という言葉の関係性については、小倉めぐみ『『強者の論理』の現代～Marshall Mathers' BackLash～』(名古屋市文化振興事業団編『創造の輪』2005年6月号に所収)の中でも取り上げている。具体的には前掲論文、p.106-107の部分を参照されたい。
- (6) 故に映画『ラッシュ・アワー』の中で香港人であるジャッキー・チェンが黒人の相棒であるクリス・タッカーの真似をして「ニガー」と黒人の前で使い、言われた相手が激怒したり、映画『グリッドロック』の中で薬物中毒のミュージシャンを演じるティム・ロスが黒人の麻薬密売人の前で「ニガー」と使って密売人が激怒するのを相棒役のトゥバック・ジャクールが「こいつは自分のことを黒人だと思ってるんだよ」と弁解したりするシーンは一種コミカルな雰囲気醸し出している。
- (7) 『介護入門』p.55
- (8) 『文芸春秋』九月特別号(2004年9月 文芸春秋社)p.385
- (9) 『Quick Japan』vol.56(太田出版 2004年9月)p.56
- (10) モブは自らが生まれ育った土地柄についてこう述べている。
「『村』というよりも『部落』という言葉がしっくりきます。祖父の世代までは『部落』という言葉は、被差別部落をあらわすためではなくて、きだみのるさんが言われるような共同体の一つの単位として使われていました。『部落』という字の横に『むら』とルビをふりたいぐらいで、実際にそうやって書いた学生時代の小説もあるんです。」
『文学界』九月号(文芸春秋社 2004年9月)「モブ・ノリオ——文学から与えられた力」p.223
- (11) 陣野俊史『ヒップ・ホップ・ジャパン』(河出書房新社 2003年10月)p.55
- (12) 『Quick Japan』vol.56;p.78
- (13) 『介護入門』p.59-60

- 04 「モブ・ノリオ——文学から与えられた力」 p.238-239
- 05 John G. Russell, "Consuming Passions: Spectacle, Self-Transformation, and the Commodification of Blackness in Japan," *Positions: East Asia Cultures Critique* (Duke University Press) Vol.6 No.1 Spring 1998, p.166
- 06 このコメントは2005年6月6日にジョン・G・ラッセル氏のお時間を頂いてこの小説についての感想を求めた際に得られた言葉である。貴重なお話をしていただいたラッセル氏には感謝を表したい。
- 07 「モブ・ノリオ——文学から与えられた力」 p.224
- 08 『介護入門』 p.11
- 09 「モブ・ノリオ——文学から与えられた力」 p.228
- 20 『介護入門』 p.45
- 21 前掲書, p.45
- 22 モブ・ノリオ『食肉の歴史』(『新潮』2004年11月号所収) p.135-136
- 23 『介護入門』 p.15-16
- 24 『文芸春秋』2004年12月号, p.90
- 25 例えばインターネットでこの本に関する一般読者の書評などを検索しても主人公を「ニート」と捉える立場の評者は多い。主なものを挙げると、「日々草 私のおいたち(我が子供たちに贈る言葉」(<http://plaza.rakuten.co.jp/mtfujikon/2000>) (引用者参照日2005年7月2日)では「現在も無業のモブ・ノリオは典型的な現代ニートの若者である。」という表記や、「介護入門 モブ・ノリオ」(<http://mojo.pobox.ne.jp/archives/000294.html>) (引用者参照日2005年7月2日)では「内容はってーと、寝たきり痴呆老人を介護するニート(流行語使っちゃった)な若者の本音って感じなんだけど、筋がツルツルよく飛ぶ。」という表記が代表例である。
- 26 玄田有史・曲沼美恵『ニート——フリーターでもなく失業者でもなく』(幻冬舎 2004年7月) p.10
- 27 『介護入門』 p.37
- 28 前掲書, p.33
- 29 前掲書, p.33
- 30 前掲書, p.16
- 31 前掲書, p.16
- 32 『Quick Japan』 vol.56; p.57
- 33 「ダウンナー大学」 p.26-27
- 34 『Quick Japan』 vol.56; p.57
- 35 『AERA』(朝日新聞社) 2004年8月2日号 p.75
- 36 日本テレビ『爆笑問題のススめ』2005年3月14日放映より抜粋。